

スノーボール・サンプリング法による大規模調査とその有効性について

02弘前調査データを用いた一般的信頼概念の検討

石 黒 格

1. パーソナル・ネットワーク研究の系譜

我々は、他者との関係性の中で日常生活をおくっており、態度や行動を様々な意味で対人関係に制約されている。社会集団（それは、ごく小さな友人集団であることもあれば、巨大な国家であることもある）が定義できたとき、その構成員すべての対人関係のネットワークを、ソーシャル・ネットワークと呼ぶ。ソーシャル・ネットワークのどこに位置し、誰と関係を持つのか、あるいは特定の他者とどのような関係を持つ他者と関係を持っているのか、といったネットワーク上の位置は、人々の態度や行動、あるいは達成を規定する要因のひとつである（Rogers & Kincaid, 1981; Burt, 1993）。

なかでも、人々が直接の関係を有している他者との対人関係ネットワークであるパーソナル・ネットワークは、人々の態度や行動に極めて重要な意味を持っている。なぜなら、パーソナル・ネットワークに含まれる他者は、人々が直接働きかけることができる相手であり、また、直接働きかけてくる相手だからである。

Lazarsfeldら(Lazarsfeld, Berelson, & Gaudet, 1948; Katz & Lazarsfeld, 1955)の投票行動研究は、人間行動あるいは、その集積としての社会現象において、パーソナル・ネットワークが重要な役割を担っていることを示した先駆的な研究であろう。Lazarsfeldらは、「マスメディアの説得能力は、人々の態度を容易に改変する」という、いわゆる「マスメディアの強力効果仮説」を実証することを目指して大規模な時系列調査を行った。しかし、結果としてマスメディアの効果はほとんど見られず、人々の行動を変化させるもっとも直接的な要因は、身近な他者から受けた説得や、会話から得た情報だったのである。

投票行動研究以外にも、夫婦の役割分離（Bott, 1971）異質への寛容性（Fischer, 1984）逸脱行動（Sherman et al., 1983）など、社会的に重要な態度や行動について、パーソナル・ネットワークの動きを示した研究は数多い。

そうした研究のなかで、パーソナル・ネットワーク測定の代表的な手法として用いられているのがName Generatorである。この方法は、調査対象者に日常的に接触を持つ他者、すなわちパーソナル・ネットワークの構成員の名前をあげてもらい、それぞれの他者についてその属性や関係性

を尋ねていく手法である。さらに名前の挙がった他者同士の関係性を推測させ、調査対象者の認知世界のパーソナル・ネットワーク（認知ネットワーク）におけるソシオメトリック・テストを行うこともある。(Rogers & Kincaid(1981)は、この方法を疑似ソシオメトリと呼ぶ)。Fischer(1984)は疑似ソシオメトリを用い、都市住民と村落住民とで、ネットワーク密度と精神的健康との関係が異なっているという、重要な知見を見いだした。

ネットワーク全体、すなわちソーシャル・ネットワークから検討の対象を限定し、パーソナル・ネットワークを扱うことは、方法論上の優位点も有している。なんらかの基準で定義した社会集団全体のネットワーク構造を測定すれば、たしかに広範な問題についての検討が可能である。しかし、対象とする社会集団のサイズが大きい場合、その測定は極めて困難になる。n人の集団についてネットワーク全体を測定しようとした場合、ありうる関係の数は $n(n-1)/2$ と、nに対して指数関数として増加するからである。

そのため、ネットワーク全体の構造を視野に入れた研究は、どうしても小規模の集団を対象として行われ、結果として知見の外的妥当性（一般化可能性）を高めることを難しくしていた。

一方、Name Generatorは、一般的な計量調査の調査票に含めることが可能である。代表性の高いサンプルに基づいて、パーソナル・ネットワークの特性と、人々にパーソナル・ネットワークが及ぼす帰結について検討することが可能となるのである。

しかし、Name Generatorや疑似ソシオメトリが十分にパーソナル・ネットワークの構造や特性を測定しているとは言えないことは明らかだろう。人々の認知ネットワークの構造は、かならずしも現実の（actualな）ネットワークの構造とは一致しないのである（Krackhardt, 1987）。

ただ他者の態度や行動を推測するだけでも、我々の認知には様々なバイアスが含まれる。たとえば、他者の態度を推測する際に自己の態度を投影する、強い傾向がそれである（Ross, Greene, & House, 1977）。まして、他者同士の関係性について、我々がすべて正しく判断できていると考えることには、大きな無理が伴う。

同時に問題となるのは、関係の相互性が失われることである。Name Generatorでは、調査対象者が一方的に他者との関係を評価した結果のみをデータとして扱うことになる。そのため、一方の評価が他方の評価と食い違うといった、複雑だが日常的な現象をほとんど理解できないことになる。

こうした、Name Generatorと疑似ソシオメトリの欠点を、大規模調査に適用可能という利点を残したまま補おうとする手法の一つが、スノーボール・サンプリング法である。

2. スノーボール・サンプリング法

スノーボール・サンプリング法は、アイディア自体は単純なものである。まず、調査対象者にName Generatorと疑似ソシオメトリに回答してもらおう。その上で、Name Generatorに名前の挙がった他者に直接調査するのである。しかし、この方法によって検討可能となる課題には、極めて重要なものが含まれる。

おおよそ、スノーボール・サンプリング法は以下の手順で行われる（概略は図1に示した）。

- (1) 回答者をサンプリングする
- (2) 回答者に対して、調査票および配偶者・他者の調査票を密封した封書を送付し、調査への協力を依頼する。他者への調査票は宛名を書くだけで発送できるよう、あらかじめ切手を貼ってあり、依頼状なども含まれている。
- (3) 回答者には配偶者および日常よく接する3名までの他者をあげてもらい、互いの関係性や他者の態度推測などについて回答を求める。
- (4) 自らの回答と対応するように留意した上で、他者に同封した調査票を送付するよう求める。
- (5) 回答者、配偶者、他者からのデータを集計し、必要な形に加工する。

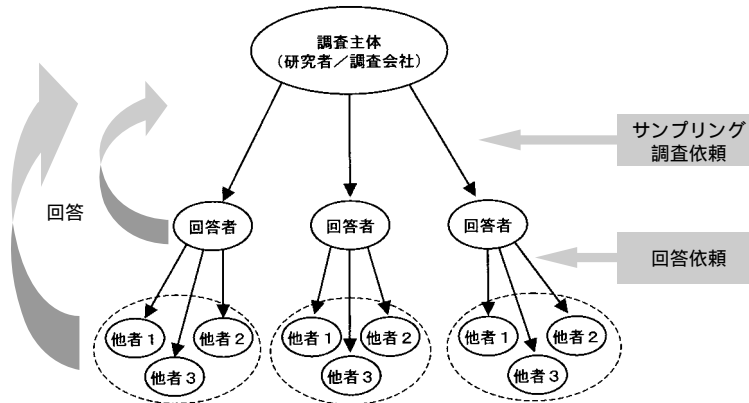


図1 スノーボール・サンプリング法の手続き
点線で囲まれた部分が、回答者のパーソナル・ネットワークに関する実測データとして扱われる。

一対一の関係（ダイアド）に限っても、スノーボール・サンプリング法によって検討可能になる課題は多い。人々の対人認知はどの程度正確であり、どの程度バイアスされうるだろうか。人々は、他者から受けている評価を正しく知っているのだろうか。

日常的で頻繁な接触は、互いの態度を似通ったものにしていくだろうか。態度の一致、不一致は二人の人間関係にどのような意味を持つだろうか。こうした重要な問題を、スノーボール・サンプリング法はデータを用いた実証的検討の俎上に乗せるのである（図2）。

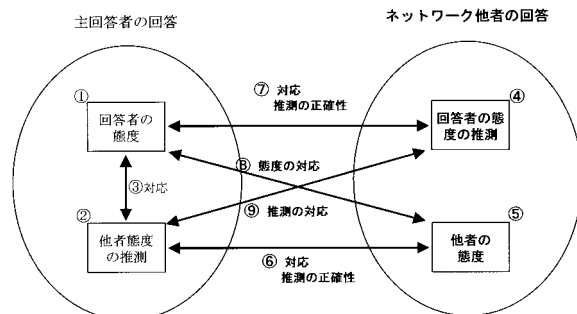


図2 ダイアド（1対1コミュニケーション）単位で見たときの、スノーボール・サンプリング法の有用性。太字はネットワーク他者に関するデータが得られた場合のみ検討可能となるが、コミュニケーションの効率など、様々な課題を検討しうる。

むしろ、スノーボール・サンプリング法の利点は、ダイアド関係を詳細に検討できることだけではない。人々のパーソナル・ネットワークについての情報を得ることができることにある。むしろ、その量は限定される。人々の持つ知人の数は、容易に3桁に達するため、その全体から直接にデータを取得することは極めて困難なのである。回答者に与える負担も考えれば、測定可能なネットワーク他者の数は、せいぜい数名であろう。つまり、測定されるのはパーソナル・ネットワークのごくごく一部に過ぎないことになる。

しかし、研究の対象を個人や対人関係の基本的な性質に置くのであれば、少数の、特に顕在性の高いネットワーク他者を測定の対象にすることで、十分に研究の目的を果たしうる。もっとも接触し、もっとも影響し合う他者との関係性が、人々の日常生活において、もっとも重要な役割を担うと考えられるからである。よって、測定の対象が少数の他者に限られたとしても、そこから得られた指標を、調査対象者のパーソナル・ネットワーク特性の近似として扱うことができる。

ネットワークの近似可能性と調査結果の外的妥当性の高さを考えたとき、スノーボール・サンプリング法は、極めて有効な調査手法として立ち現れてくる。しかし、技術面での未整備などにより、国内外を問わず、実施された例は限られているのが現状である。筆者は2001年度に羽淵、山下、清水（いずれも弘前大学人文学部）とともに教育改善推進費（教育研究プロジェクト経費）を受け、弘前市民1600名を対象とするスノーボール・サンプリング調査を行った。以下では、その概略を述べる。

3. 調査方法

- ・対象者

弘前市選挙人名簿に記載された20～75歳までの男女

その配偶者および対象者が「日頃よく話したりやりとりする」他者3名

- ・計画サンプル

1600名

- ・抽出法

二段階確率比例法による無作為系統抽出

- ・調査方法

郵送法、催促状2回

- ・調査期間

2002年2月中旬から3月中旬

4. 回収率

主たる回答者の回収数は571であった。転居、死亡などの無効票を除いて計算された回収率は37.1%である。対象へのコンタクト手段として郵送法を用いたことや、スノーボール・サンプリング法が回答者に対して大きな負荷を課す方法であることを考えると、この回収率は決して低いものではない。

配偶者と他者の回収数は、ただ単純に回収された調査票を数えるだけではカウントできない。なぜなら、主たる回答者と同様、回答者によって選ばれた他者自身が回答していない場合がありうるからである。対象者名簿が得られないスノーボール・サンプリング法では、この点についての厳密なチェックは不可能である。しかし、回答者と他者の双方の回答を比較することで、事後的にある程度のチェックは可能である。

まず、回答者からデータが得られず、他者からのみ返送があったケースは除く必要がある。これは、チェックと言うよりもそうしたケースを分析に含めることが無意味であるという理由による。

第二に、回答者が答えた他者の性別と、他者が答えた性別との比較が可能である。性別が食い違っている場合（配偶者については回答者と性別が同じ場合）、回答者に選ばれた他者自身が回答していないと判断した。

第三に、回答者が答えた他者との関係と、他者が答えた回答者との関係との比較が可能である。ややゆるい条件とはなるが、血縁/非血縁という2カテゴリと考えたとき、回答者の答えと他者の答えが一致していないときを無効と考えることとした。

以上、三重のチェックを行った結果、有効なデータとして確定した他者の数を表1にまとめた。

ここから、ダイアドとして、配偶者との関係が318、配偶者以外の他者との関係が651の、計969が分析可能となることがわかる。

続いて、一人当たり、何名の他者について回答が得られたのかを検討しておく。他者の性別に関する回答を元に、

男性、女性、無回答のコードがあるときをカウントし、回答者ごとに集計した結果が表2である。

他者が最低でも一人は得られたという限定付きで分析対象を絞ったとすると、回収数は130減少し、441となる。このときの回収率は28.7%となる。この値は一般的な郵送調査としては高いものではないが、スノーボール・サンプリング法を用いた調査としては比較的高い部類に属すると言える。ただし、無回答についても他者のデータが存在すると判断しているため、個別の分析で利用可能なデータはより少なくなる。

表1 データを得られた他者数

	単 純	回答者の データも 存 在	性別と 関係が 一 致
配偶者	356	325	318
他者1	353	311	218
他者2	331	293	222
他者3	320	283	211

表2 回答者一人当たりの直接データを得られた他者の数

回答を得られた 他者の数	頻 度	比 率
0	130	22.8
1	166	29.1
2	99	17.3
3	99	17.3
4	77	13.5

5. 回答者の基本的なプロフィール

回答者のデモグラフィック・プロフィールを、表3から表9に示した。女性が多いこと、20代の回答が少ないことなど、母集団からのバイアスは存在する。しかし、いずれも郵送調査を行った場合の、一般的な傾向から大きく食い違うものではない。適切に実行されたスノーボール・サンプリング法が、通常の計量調査の延長として理解できることを示しているだろう。

	頻度	%
男性	251	44.0
女性	320	56.0

	頻度	%
20代	47	8.2
30代	65	11.4
40代	112	19.6
50代	150	26.3
60代	116	20.3
70代	81	14.2

	頻度	%
12年未満	156	27.3
16年未満	315	55.2
16年以上	86	15.1
DK/NA	14	2.5

	頻度	%
農業	61	10.7
農業以外の自営業(自宅)	32	5.6
農業以外の自営業(自宅外)	20	3.5
民間企業に勤務	122	21.4
役所・公的機関に勤務	53	9.3
専業主婦	102	17.9
パート・アルバイト	55	9.6
学生	11	1.9
その他	31	5.4
無職・家事手伝い	74	13.0
DK/NA	10	1.8

	頻度	%
結婚している	424	74.3
離死別	61	10.7
未婚	78	13.7
DK/NA	8	1.4

	頻度	%
子供がいる	442	77.4
子供はいない	109	19.1
DK/NA	20	3.5

note : 子供がいる場合の年齢は平均39.7、SD 30.6

	頻度	%
生まれたときからずっと	85	14.9
5年以下	68	11.9
6~10年	49	8.6
11~20年	92	16.1
21~30年	104	18.2
31~40年	70	12.3
41年以上	94	16.5
DK/NA	9	1.6

では、人々のパーソナル・ネットワークを測定対象とすることで、どのような意味ある知見を示すことができるだろうか。本論では、山岸(1998)の「信頼の解き放ち理論」の中心的な議論のひとつである、一般的信頼の対人関係特性による変化を検討対象とすることを考える。

6. 信頼の解き放ち理論

信頼の解き放ち理論は、90年代の社会心理学において、もっとも影響力を持った理論的研究のひとつである。山岸の議論の中心的なテーマとして、相手が協力的かどうか分からない対人場面において、人々がいかにしてその不確定性を減少させ、取引関係を成立させるのか、という問題がある。

山岸は、中古車市場を例にあげて、社会的な不確定性を説明する。中古車を買おうとしたときに、その商品の品質がセールスマンが話す通りであるのか、欠陥を隠して売りつけようとしているのかを判断することができないとする。良品だという相手の説明を信じて購入したら、走行距離が1000kmにも満たないうちに壊れる欠陥車だったということもありうるのである。自分がコストを払ったときに、相手がそれに見合う対価を与えてくれるのかどうか。これが他者の意図に依存する場面が、山岸の言う社会的な不確定性の存在する状況である。そして、社会的な不確定性が存在するときに、他者が自分に協力的であると信じるのが、山岸の言う信頼である。

能力ではなく意図が中心的な意味を持つことを、山岸は強調する。つまり、「相手が協力可能かどうか」という意味での信頼は、問題とされない。たとえば、相手が協力したくても必要な資源がないことがわかっている場合においては、信頼がなんらかの役割を果たす余地はないのである。協力できる能力や資源の存在を前提とした上で、相手の意図が問われる。

この点をもっとも強調されるのが、信頼と安心の区別である。日常用語だけでなく学問上の専門用語としても、同じく信頼と呼ばれてきたふたつの関係性を区別するのである。

我々が他者との関係を築いており、他者には協力する能力があるとする。このような場合でも、他者が協力するかどうかには社会的な不確定性が存在しないことがある。それは、協力することが相手にとって利益になることが明らかな場合である。あるいは、協力しないことが他者にとって不利益になる場合である。こうした関係は、安心に基づくものとされる。

マフィアのボスと手下との関係を、山岸は例としてあげる。ボスが手下を「信じている」というとき、それは「相手は裏切ることができるが、裏切らないと信じている」わけではない。手下が裏切りを働くことは、多くの場合、死を意味する。非協力は、合理的な選択肢とはならないのである。

同様に、関係を持つことのできる相手が極端に制限されている場合も、信頼の果たす役割は小さい。相手を裏切って関係が破綻したあとで、次につきあう相手を見つけれない事がわかっている場合には、人々は相手を裏切ることはしない。

安心関係は、潜在的な取引相手がいなく、いても現在の取引相手より劣ることが明らかな場合は、もっとも合理的な関係のスタイルとなる。しかし、よりよい取引相手が潜在的に存在する場合には、取引相手を変えていたら得られていたかもしれない利益の増分を失うコストが生じる。機会コストの発生である。そのため、潜在的な取引相手が多数存在する（よって、よりよい取引相手が存在する確率が高い）社会環境においては、安心関係に拘泥することは、大きな損失を被ることにつながり、合理的ではなくなるのである。その場合は、新たな取引相手を信頼し、新たな関係を築

くことが合理的になる。

山岸は信頼性に関わる個別の情報がない他者に対する信頼、すなわちデフォルト値として人々が持つ信頼を、一般的信頼と呼んだ。一般的信頼が高い人々は、よりよい取引相手が現れたとき、相手の協力を見込むため、新たな関係を築くことができる。そのため、機会コストが大きければ、一般的信頼の低い人々よりも大きな利益を得ることができるのである。信頼が既存の関係から人々を解き放ち、より利益の多い相手との関係を築くことを可能とするのである。

囚人のジレンマゲームを用いた一連の研究の中から、山岸は安心関係の中に置かれた人々は、新たに登場した潜在的な取引相手に対する信頼を低下させることを見いだした。安心関係の構築は、社会的不確実性を低減する有効な戦略ではあるが、「信頼を破壊する」のである。こうした結果から、山岸は特定他者との固定的な関係や、そこで築かれた個別的な信頼は、一般的信頼にはつながらないと主張した。

この議論は、特定他者（たとえば育て親や近隣）との親密な関係が、後に安定した人間関係を構築するための基盤となるという広く共有されたイメージを否定する、大きな理論的指摘である。他者に対する信頼は社会関係資本（Coleman, 1988）のひとつとして、個人だけでなく社会全体にとっても重要な資源であると考えられている。そうした議論の中では、信頼は安定した人間関係への参加から醸成されると論じられているからである（Putnam, 1993; 2000）。山岸の理論は、こうした議論とは逆の結論を引き出す。この点が、信頼の解き放ち理論の、大きな論点のひとつであった。

7. 信頼の解き放ち理論に含まれる未実証の問題

信頼の解き放ち理論は、社会関係という社会構造レベルの変数と、一般的信頼という個人レベルの変数との対応を予測し、しかも、そこから従来直観的理解とは反する結論を引き出したという意味で、重要な貢献であった。しかし、その重要性にも関わらず、現実場面の中で、どのような社会関係が一般的信頼を促進するのかという点について、実証的な検討がほとんど行われてこなかった。本論では、スノーボール・サンプリングによるネットワーク・データの利点を活かすことで、これら未実証点のいくつかを検討しうることを示しておきたい。

第一の問題は、すでに述べた社会関係資本に関する議論と信頼の解き放ち理論との不整合である。これらの理論は特定他者との親密で安定した関係が、一般的な他者に対する信頼を醸成し、人間関係の構築を可能にする論じる。山岸の理論的予測は、これらの研究と逆である。

身近な、特定他者との人間関係、すなわちパーソナル・ネットワークにおける人間関係の性質は、一般他者との関係の期待に一般化されるのか。この点は、検討されるべき課題だと言える。

本論では、パーソナル・ネットワークにおける人間関係の性質として、個人レベルの認知変数と構造的な変数の双方をとりあげる。認知変数として、ネットワーク他者との関係に対する不満を用いる。不満が小さく、関係が良好である場合でも、信頼の解き放ち理論によれば一般的信頼は上昇

しない。しかし、Coleman など、社会関係資本に関する議論では、身近な他者との良好な関係が一般的信頼を形成する。

構造変数としては、ネットワーク他者とのパーソナル・ネットワークの重複をとりあげる。複数の個人のパーソナル・ネットワークが互いに重複している場合、ネットワーク内での関係は安定していると考えられる。それは、ネットワークに組み込まれた人々にとって、新たな関係を築くチャンスが小さいことを意味する。よって、信頼の解き放ち理論によれば、重複の大きなパーソナル・ネットワークを築いている人々は、一般的信頼が低下するだろう。

逆に、社会関係資本の議論では、安定的な関係は信頼を醸成する。よって、重複度が大きいときに、一般的信頼が高くなると予測される。

第二の課題は、都市部と村落部の比較である。山岸（1998）にも頻出し、その後も半ばステレオタイプとして流通しているのが、都市的人間関係が信頼関係をベースとし、田舎、つまり村落的な人間関係が安心関係をベースとしているという議論である（辻・針原，2002 a）。

都市的な状況では、潜在的な取引相手が多だけでなく、匿名性が高いことから非協力の誘因が大きい。そのため、不特定多数の他者を信頼し、同時に目の前にいる特定他者の信頼性を見抜く能力が必要となる。そのため、数多い人間関係の経験のなかで、一般的信頼（と信頼性を看破する能力）が醸成される。

一方、村落部では潜在的な取引相手はほとんど存在せず、人間関係が固定的である。さらに、非協力の態度をとれば、そのことが潜在的な取引相手すべてに知れ渡り、孤立してしまうことがはっきりしている。非協力が不利益であることがはっきりしている以上、相手の裏切りを想定する必要はない。つまり、他者を信頼する必要がないのである。

都市が比較的異質な人々に寛容であるのに対して、村落部では内部で強力な協力関係を築く反面、「よそ者」に対する警戒心が強いという日常的な観察などからも、この指摘は直観的には理解できる。

同様に、自由に取引関係が形成され、解消されるアメリカ社会と、固定的な取引関係の中での「信頼」が重視される日本社会とが対比される。アメリカでは、よりよい取引相手がいれば、そちらに顧客を奪われるのに対して、日本では（弱まってきてはいるが）系列会社との安定した取引が重視され、新規参入が阻害されるのである。

このことは、日本／村落では、アメリカ／都市に比べて一般的信頼の形成が阻害されることを意味している。山岸（1998）は、日米の都市住民を対象に社会調査を行い、日米で一般的信頼尺度得点の平均値が異なることを実証している。

一方で村落部と都市との比較は、ほとんどなされてこなかった。潜在的な取引相手の量や社会関係の流動性を信頼関係と安心関係の合理性を分ける重要な変数として扱う以上、都市部と村落部との比較は、日米の都市における比較よりも大きな意味を持つように思われる。日本とアメリカでは、信頼以外にも様々な点で対人関係と、対人関係に対する期待とが異なるからである。膨大な干

渉変数がある中で、一般的信頼の平均値に差があったとしても、それが直ちに機会コストという概念で理解される差であると結論するのは難しい。同一国内で、都市部と村落部を比較すれば、多くの干渉変数のうち、いくらかを統制することが可能になる。

都市と村落に関する議論の問題は、それだけではない。都市と村落についての議論は、二つの状況における人間関係についての推測に依拠している。現在の人間関係の安定性と、潜在的な取引相手の多寡、さらには非協力行動が他者に知れ渡ることのリスクなどである。だが、単純な平均値の比較では、この点はまったく考慮されない。日米において、一般的信頼尺度得点の平均値の差が確認されたとしても、モデルが支持されたとは言えないのである。よって、都市と村落の住民の一般的信頼は、それぞれの住人がもっている対人関係の性質を同時に視野に入れた上で比較され、検討されなければならない。

辻・針原(2002a)は、東京の区部と新潟県の村落部(小都市含む)において、一般的信頼を測定し、その規定因を検討した。その結果、村落部と都市部の両サンプルでは、一般的信頼の平均値に差がないことを見いだしている。さらに(辻・針原、2002b)都市部においては地理的に近接した知人が多く、ネットワークの推移性が高いといったネットワーク構造が、一般的信頼を説明する要因であることを示唆した。信頼の解き放ち理論が重要な理論的貢献であるがゆえに、こうした、理論面レベルでの実証を積み重ねることの重要性は大きいと考えられる。

筆者らが2002年に弘前市で取得したスノーボール・サンプリング・データ(以下、02弘前データ)は、計画段階で150、実測で40程度の村落部在住者を含んでいた。さらに、そもそもの目的により、パーソナル・ネットワークに関する豊富な情報を含んでいる。よって、ここで論じた、信頼の解き放ち理論に含まれる未検証の問題を取り扱うのに、格好の資料を提供している。

本論は、02弘前データを元に、都市と村落の一般的信頼の差という問題を、探索的に検討することを主たる目的とする。

8. 尺度項目

弘前スノーボール・サンプリング調査では、回答者の一般的信頼を測定する尺度として、「ほとんどの人は信頼できる」に対して「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4点で回答することを求めていた。「そう思う」と回答した回答者が少数であったため、「ややそう思う」と統合し、3値にした上で、目的変数とした。この尺度は値が高いほど、一般的信頼が高いことを示す。

ネットワーク特性として、ふたつの変数を作成した。

認知変数として、ネットワーク他者に対する不満を、4人までの他者について平均した値を算出した。この値を、パーソナル・ネットワークにおいて、ネットワーク他者との関係が良好ではないことの指標とした。不満について、回答者はそれぞれの他者について「かなり不満がある」「少しは

不満がある」「あまり不満はない」「まったく不満はない」の4点で回答した。

構造変数として、他者が評価した互いのパーソナル・ネットワークの重複を、4人までの他者について平均し、パーソナル・ネットワークの重複の指標とした。それぞれの他者は、回答者と自分の人間関係の重複について、「ほとんど全員が知り合い」「半々くらい」「共通の知り合いは少ない」の3点で回答した。

統制変数として、性別は女性を1、男性を0とするダミー変数とした。職業は有職を1、無職とパート・アルバイトを0とするダミー変数とした。現地域在住年数は、「1. 生まれたときからずっと」「2. 5年以下」「3. 6~10年」「4. 11~20年」「5. 21~30年」「6. 31~40年」「7. 41年以上」として測定したカテゴリの値から、1を引いた値を尺度として用いた。ただし、「生まれたときからずっと」と回答した場合には、年齢を元に、他のカテゴリに配分した。

それ以外の統制変数として、年齢と教育年数は、回答が得られた年数を、そのまま尺度として用いた。

9. 結 果

まず、村落部と都市部との、単純な平均値の比較を行っておく。村落部から得られた回答者と、旧市街・郊外から得られたサンプルの間で一般的信頼の平均値を比較したところ、村落部2.43 (SD=0.69, n=37)、旧市街・郊外で2.13 (SD=0.70, n=512)であり、t検定の結果、この差は5%水準で有意だった。すなわち、村落部でより一般的信頼が高かったことになる。

この結果は、いくつかのデモグラフィック変数を統制しても確認された。一般的信頼を目的変数とし、説明変数として村落部在住のダミー、統制変数として性別、年齢、教育年数、職業の有無、そして現住所の居住年数を投入した順序ロジット回帰分析を行ったところ、村落部在住の正の効果があり、有意だった(表10第2列)。

表10 一般的信頼に対する村落在住/ネットワーク特性の効果

目的変数：一般的信頼		
	デモグラフィック変数のみ	ネットワーク他者との関係性
ネットワーク他者への不満の平均値		- 0.67***
他者から見たネットワークの重複		0.44*
村落部在住	0.92**	0.26
年齢	0.01	- 0.00
教育年数	0.15***	0.19***
職業	- 0.07	- 0.30
性別	0.07	0.06
現住所居住年数	0.08+	0.13+
n	540	354
尤度比カイ自乗値	28.5***	38.8***
分散説明率	0.03	.05
カットポイント1	0.98	0.30
カットポイント2	3.21	2.67

note: +:p<.10, *:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

このことから、村落部と旧市街・郊外では一般的信頼の平均値が異なることがわかる。しかし、その方向は山岸の予測とは逆であり、村落部でより一般的信頼が高いことが示された。

弱い効果ではあるが、現住所への在住期間が長いほど、一般的信頼が高くなっていることも重要である。一カ所に長期間留まっている場合、固定的な人間関係が形成されやすいと考えられ、一般的信頼は醸成されにくいはずである。この結果も、信頼の解き放ち理論の予測とは反する。

続いて、特定他者との対人関係と一般的信頼との関係について検討した。一般的信頼を説明するモデルに、新たにネットワーク他者との関係への不満およびネットワーク他者から見たパーソナル・ネットワークの重複度を投入して一般的信頼を予測する順序ロジット回帰分析を行った（表10最右列）。

その結果、ネットワークの重複度が大きいほど、ネットワーク他者との人間関係への不満が小さいほど、一般的信頼が高くなっていた。この結果は、いずれも信頼の解き放ち理論よりも、社会関係資本の文脈で主張される、直観的な理解にそうものである。

さらに重要な結果として、ネットワークの構造や認知に関わる変数を投入することで、村落部在住の効果が有意ではなくなったことがあげられる。ネットワーク構造を検討の視野に入れることで、村落部と都市部との相違を説明できる可能性がある。

10．考察と今後の課題

これまでの分析で、安心と信頼に関する、信頼の解き放ち理論の理論的前提が、かならずしも支持されないことが明らかになった。村落部に在住する人々はより一般的信頼が高く、また、個別のネットワーク他者との人間関係が良好であるときに、一般的信頼が高かった。

村落部で一般的信頼の平均値が高くなったこと、それ自体を過剰に解釈するべきではないだろう。村落部から回収されたサンプルが少数であり、また、辻・針原（2002a）の知見とも整合しないからである。

さらに、ネットワークの認知や構造を変数として投入することで、村落と都市の平均値の差が確認されなくなったことも考えなくてはならない。とはいえ、ネットワーク他者への不満と一般的信頼の負相関から、直ちに親密で良好な対人関係が一般的信頼を醸成すると結論することはできない。この結果だけでは、一般に他者に対して好意的な反応を示す人々が、個別のネットワーク他者にも、一般他者にも好意的に回答したという解釈を免れえないからである。

むしろ、今回の分析で、特に重要であるのは、ネットワークの構造レベルの変数であるネットワークの重複が、一般的信頼を押し上げていたという結果だろう。

このことは、対人関係の構造が人々の一般的信頼を規定することを示した点で、信頼の解き放ち理論を支持する。しかし、身近な、特定他者との安定した関係が人々の一般的信頼を高めた、という意味では、信頼の解き放ち理論の予測とは反するのである。

しかし、以上の結果が、ただちに信頼の解き放ち理論の理論的前提を否定するものではない。本研究のデータには、いくつか大きな問題が含まれるからである。

第一に、一般的信頼尺度そのものの問題がある。「ほとんどの人は…」という質問文に含まれる「人」として誰を想定するかによって、回答が異なることが指摘されているからである。辻・針原(2002a)は「人」という単語を既知/未知の他者として明確にし、スプリットバロット法によって、人々の回答がどのように異なるのかを検討している。その結果、既知の他者と明示されている場合に、尺度の得点は明らかに高かったのである。そして、従来通り、単に「人」とのみ提示された回答者の平均点は、既知の他者と未知の他者の中間であった。

この結果は、「ほとんどの人は…」という質問文を提示されたとき、回答者が想定する他者は既知と未知が混在していることを強く示唆している。既知、未知、どちらの他者を想定するかが、ネットワーク構造や個別他者との対人関係によって異なれば、結果として一般的信頼が変動したように見える。村落部では人間関係が狭いがゆえに、「ほとんどの人は…」という質問文から、日常的に交流のある他者が想起されることが多かった、という解釈は、十分に成り立つ。

しかし、既知の他者を想定して回答された信頼は、すでに山岸が主張した一般的信頼ではない。特定他者に対する個別的信頼か、あるいは安心を測定していると考えられる。よって、本研究のデータから、一般的信頼について、断定的な結論を出すことはできないのである。

第二に、調査の回収率が高いとは言えない点も、一般的信頼の分析には重大な問題となる。未知の他者である調査者からの協力要請に対して応諾する人々は、論理的には一般的信頼が高いと考えられる。30%程度という回収率を考えると、一般的信頼の高い人々に回答者が偏っている可能性は十分に考えられる。02弘前データで得られた結果は、一般的信頼が高い人々においてのみ観察されるものであり、一般的信頼の高い人々から低い人々までを網羅的に対象にした場合とは、異なった結果が得られる可能性もあるだろう。

以上のように、測定レベルではいくつかの問題を抱えているものの、スノーボール・サンプリングによってパーソナル・ネットワークについての情報を収集し、それによって一般的信頼の理論的背景に関する未実証の問題を検討するという、本研究のアプローチの有効性は示されたと思われる。そして、スノーボール・サンプリング法の有効性は、一般的信頼というテーマに固有のものではない。対人的相互作用に関わる、極めて広い領域に適用可能なのである。

方法論的には改良の余地が残されている。たとえば、現行の方法では単に回収率が低だけでなく、回答者が選んだ他者と、他者用の調査票に回答する他者が一致しないといった測定エラーによって、さらに分析に含めうる回答者が減少している。また、疑似ソシオメトリやスノーボール・サンプリング法によって測定されたネットワーク特性が、回答者が所属する社会集団全体のネットワーク構造を測定した場合に得られるであろう指標を、どの程度まで近似しているのかという点についても、検討が不足している。

たとえば、本論で用いたネットワークの重複度という指標が、回答者のパーソナル・ネットワー

クが高密度で閉ざされたものであることを意味しているかどうかは、厳密には回答者の知人すべてからデータをとらなければ判断できない。近似値としての測定として、他者4人からのデータで十分であるのか、あるいは、さらに測定対象とする他者の数を減じて、近似が悪化しないと言えるのかは、実証的な知見を元に理解される必要がある。

しかし、これらの問題を理論的、実践的に検討し、改善していくことで、スノーボール・サンプリング法は人文、社会科学の広範な領域に、重要な資料を提供しうるであろう。

引用文献

- Bott, E.(1971) *Family and social network*(2nd ed.) Free Press.
- Burt, R. S.(1992) *Structural Holes: the social structure of competition*. Harvard University Press.
- Coleman, J. S.(1988) Social capital in the creation of human capital. *American Journal of Sociology*, 94, 95-120.
- Fischer, C. S.(1984) *To dwell among friends: personal network in towns and city*. The University of Chicago Press.
- Katz, E., & Lazarsfeld, P.F.(1955) *Personal Influence: The part played by people in the flow of mass communication*. The Free Press.
- Krackhardt, D.(1987) Cognitive social structure. *Social Networks*, 9, 109-134.
- Lazarsfeld, P. F., Berelson, B., & Gaudet, H.(1948) *The people's choice: how the voter makes up his mind in a presidential campaign (3rd Ed.)* Columbia University Press.
- Putnam, R.(1993) *Making democracy works*. Princeton University Press.
(河田潤一訳、「哲学する民主主義：伝統と改革の市民的構造」, NTT出版).
- Putnam, R.(2000) *Bowling alone: the collapse and revival of American community*. Simon & Schuster.
- Rogers, E. M., & Kincaid, D. L.(1981) *Communication networks*. The Free Press.
- Ross, L., Greene, D., & House, P.(1977) The "false consensus effect": An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 13, 279-301.
- Sherman, S. J., Presson, C. C., Chassin, L., Corty, E., & Olshavsky, R.(1983) The false consensus effect in estimates of smoking prevalence: Underlying mechanisms. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 9, 197-207.
- 辻竜平・針原素子.(2002a)。「一般的信頼尺度の再検討：都市と村落のデータ比較をとおして」. 数理社会学会第34回大会口頭発表.
- 辻竜平・針原素子.(2002b)。「日本人における自己卑下の規定因を探る 都市と村落のネットワーク比較から」. 日本社会心理学会第43回大会口頭発表.
- 山岸俊男.(1998)。「信頼の構造：こころと社会の進化ゲーム」. 東京大学出版会.